1975年度

駿台史学会大会

シンポジウム「地域と歴史地理」

研究発表要旨

駿台史学会

1975年12月13日

於　大学院南講堂

地方史と地域社会史

高島緑雄

1. 戦後の地方史研究の理念と運動
   (1) 国民的歴史学運動と地方史研究協議会の創立
   (2) 地方史研究の盛行
   (3) 地方史研究の，いわゆる〝曲り角〟

2. 地域社会史研究の提唱
   (1) 地域社会史理念の成立
   (2) 地方史研究批判
   (3) 地域社会史理論の問題点
   (4) 地域の地方化か，地方の地域化か

3. 新「地方史研究」への模索
   (1) 地方史研究の理念の再構築
   (2) 地方史像の総合的把握 ── 郷土史の見直し，生活史の提唱など
   (3) 総合性の基軸はなにか

MEMO

合衆国における地域研究（Area Studies）と「地域」概念の史的検討

油　井　大三郎

Ⅰ　は　じ　め　に

a．言葉の交通整理

Area, Region, Section, Community,

Area, Studies, Regional Science, etc.

b．「地域研究」評価の論争的性格

帝国主義の政策科学か，民衆の「地域研究」（三木亘氏）か。

Ⅱ　合衆国における地域研究の性格

a．地域研究の形成と展開

ⅰ）４つの時期区分

①　前史＝Pre-W.W.Ⅰ

②　両大戦間

③　W.W.Ⅱ以後

④　１９６０年代

ⅱ）推進主体の性格

ⅲ）２つのジャンル

「新世界」の自己認識と「異文化」の全体把握

Ⅳ）３つのタイプ

①　帝国主義の政策科学・戦略研究

②　多元的文明認識志向

③　帝国主義批判の立場　ex.NACLA, CCAS.

b：地域研究の方法論的特徴とその意味

ⅰ）「地域」という対象設定

ⅱ）「諸科学の総合の場」＝integrated Area Studiesという発想

ⅲ）各地域の「文化」の全体像の追求

ex.cultural concept approach

c．小括　―　地域研究への二つの対応

政策科学批判と新しい問題のうけとめ。特に，「地域」と「文化」という問題設定について。

Ⅲ　戦後日本の世界史研究における「地域」概念

a．上原専祿氏における「地域世界」の意味

b．遠山茂樹氏による東アジア「地域史」の提言

c．三木亘氏の「大衆レベルの地域研究」論

d．小括　―　「地域」概念提起の意図＝被圧迫民族の視点と日本人の思想変革の追求

Ⅳ　「地域」概念，「地域研究」発生の世界史的意味　―　一つの試論

a．新概念発生の客観的基盤の存在

生産力発達の超民族国家的段階としての２０世紀の意味。特に，「地域統合」の意味をめぐって。

b．帝国主義発達史における「地域統合の位置」

ⅰ）「超帝国主義論」　―　「ブロック経済」　―　「地域統合」

ⅱ）反帝国主義的地域連携の発生

ex．非同盟諸国会議　OPEC．

e．補論　―　「市場圏」という概念設定とその歴史的変化

ⅰ）大塚久雄氏の「市場圏」概念

局地的市場圏 ― 地域的市場圏 ― 統一的国内市場

ⅱ）帝国主義段階の意味

資本市場圏，労働力圏という市場圏の区別の必要性

全体としての「再生産圏」という概念設定

ⅲ）「再生産圏」と生産関係の相関

d．結びにかえて

参　考　文　献

Ⅱ　Grayson Kirk, The Study of International Relations in American Colleges and Universities (N.Y.,1947)

Julian Steward, Area Research – Theory and Practice

(N.Y., 1950)
Hans Morgenthau, "Area Studies and the Study of International Relations", International Social Science Bulletin, Vol. IV no.4, 1952
Hamilton A.R. Gibb, Area Studies Reconsidered (London, 1963)
Milton Singer, "The Social Science in Non-Western Studies the Annals of the American Academy of Political and Social Science Vol.356 (Nov.1964)

川田　侃，『国際関係概論』(東大出版会，1958)
中屋健一・井出義光，「アメリカ研究とは何か」『日米フォーラム』8巻6－7号 (1962，7～8,)
陣崎克博，『アメリカ研究序説』(英潮社，1967)
林　武　『現代地域研究論』(アジア経済研究所，1969)

Ⅲ
a. 上原専祿　『世界史における現代のアジア』(未来社，1956)
同　「歴史研究の思想と実践」『歴史地理教育』1964.11.
b. 遠山茂樹　「世界史における地域史の問題」『歴史学研究』1965.6
同　「世界史把握の視点」『歴史像再構成の課題』(お茶の水書房，1966)所収
c. 三木　亘　「地域研究と世界認識」(アジア経済研究所，1968)
同　「地域研究と歴史学」『世界歴史』30巻・別巻 (岩波書店，1971)

Ⅳ
大塚久雄　『欧州経済史』(弘文堂，1956)
江口朴郎　「歴史学とマルクス主義(一)」『世界歴史』30巻・別巻(岩波書店，1971)
Joseph S.Nye,Jr., International Rogionalism (Boston, 1968)

シオニズムにおける「民族」と「地域」
― 民族形成における土地の意味をめぐって

大岩川　和　正

シオニズム運動がパレスチナにユダヤ「民族」国家を形成してくる過程で，この運動の側からも，「パイスチナ人」の側からも，この土地の「地域」としての意味が歴史的に大きく変化してきた。この報告では，シオニズム運動に着目し，ここに見られる「民族」形成の方向が，土地と住民との結合のあり方の展開を媒介として，どのように進展してきたのかを検討し，「地域」のもつ現代史的意味を探るための一環としたい。

(1)イデオロギーとしてのシオニズムにおける「ユダヤ人国家」の土地

Moses Hess から Theodor Herzl に至る西欧系政治主義シオニズムにおけるユダヤ「民族」は，観念の中で純化された「血」の紐帯で結ばれた超歴史的な共同体であり，「ユダヤ人国家」は Judenfrage 解決の手段であり，その「土地」はきわめて抽象化された空間であった。それに対し，具体的なパレスチナへの移民と入植活動の主体となった東欧系実践主義シオニズムにおいては，「ユダヤ民族」はゲットー世界における生活共同体としての実感に基礎をおいた概念として構成され，「ユダヤ人国家」は単なる手段ではなく目的であり，その「土地」も生産と生活の実体をもって創造する目的物に他ならなかった。

(2)政治運動としてのシオニズムにおけるパレスチナの土地

上記のシオニズム運動の二つの系譜とその共棲関係は，今日に至るまでイスラエルの政治過程を貫ぬく基本的契機となっていると思われる。「土地」について見ると，これがユダヤ人入植村の設立と展開の中で表現され，村落 → 国家の方向と，国家 → 村落の方向とが，パレスチナの土地を媒介として合一してきたと言えよう。(これに対し，反帝国主義 → 反シオニズムの論理構造をもつアラブ人の抵抗主体がパレスチナの土地を媒介とするパレスチナ人の運動の主体になり得たのは，1960年代末になってからであることに注意)

(3)イスラエルにおける土地(領土)の意味

イスラエル建国は，シオニズム運動にとっての一つの自己矛盾の表現であり，この矛盾の顕在化をおさえてきた要因として，第三次中東戦争までの国際関係がある。ただ，伝統的なシオニズムのイデオロギー体系が建国後の現実との乖離から破綻を余儀なくされる段階で，村落・都市・国家の領土内での体系に再編成が強いられるのは当然のことと言える。実践主義と政治主義の対立は，ここではかつてと意味の異なる土地に根ざした「イスラエル・ナショナリズム」とインタ

--ナショナルなシオニズムとの対立に転化するのではないだろうか。イスラエルの政治問題である，“Who is a Jew ?”問題はこの表現の一つであろう。

MEMO